フィールド（現場）からの風 163

宮田守男

地域の先駆者が残した素材を活用する事が大切だと考えてみませんか

12月初旬、安曇野市豊科勇屋会館で行われた、享年93歳でご逝去された中沢義直先生のお別れの会に参加する機会があった。安曇野市堀金に在住した著明な写真家・映像作家で、安曇野を愛した事でも知られた。また後継者の指導・育成にも尽力し、多くの人が中沢写真学校で学んだ。会場には約150人が集まり、中沢先生の生前の活動を記録した映像を見たり、思い出を話し合う会となった。人生を歩むときに、師と仰ぐ人と出会う。私にとって中沢先生は、映像や景色を考えるときの重要な視点を学んだ人物だ。白馬村役場観光課在籍の時、中沢先生とお会いする機会があった。当時、観光戦略の見直しに悩んでいた事に、多くの助言を頂いた。「多くの素材を残すことが重要」、「蓄積されていれば、これからの技術革新で多くの可能性が生まれる」。その後の観光戦略で、多くの素材から大きな実が結べたのは、先生の教えだった。

自らも映像作家と言い、映像を映すカメラマンでは無いことにこだわった。これからの時代、ビデオ映像が主流になる。2人でビデオ作家の育成に取り組まないかとの話で盛り上がった。ビデオ機材は、私が用意するので、機会を与えてとの提案。機材を整えるのに1000万円以上投資したとの話を数年後に聞き、驚いた事を今でも鮮明に思い出す。ビデオ作家として成長した宇留賀裕さんは、現在信州映像舎の代表として先生の意志を実践している。1998年の長野冬季オリンピック・パラリンピックの折も、会場に入場券とフイルムの提供だけの協力で、白馬の民家に写真学校の生徒と寝泊まりして、観客の視点で多くの場面を写真で残していただいた。

先生の多くの作品の中で、「回想・茅葺（かやぶき）の家」の著書の冒頭の「消えゆくものへの鎮魂歌」の一節。

「生活様式の近代化の波は怒涛のごとく茅葺民家を一挙に押し流し消滅させたのである。長い歴史の中で築いて来た美しいもの、貴重なものは、軽く考えて捨て去ると、もう絶対に当時の状態に戻すことは不可能であることをしらねばならない」、この想いを多くの写真が語っている。

この想いが、多くの人に伝わって、保存活動の一助になってほしいと願っている。先生の残された多くの素材をいかすことが、私たちの役割だと感じた日でもあった。先生のご冥福を願ってやまない。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

最後に家族からのあいさつ、この家庭環境が多くの素晴らしい作品を誕生させたのだろう